

成果報告書

(1) 活動名称

沖縄における哲学対話の活動、p4c Okinawaの設立

(2) 研究活動実施者について

氏名	河原由貴
所属	慶應義塾大学総合政策学部 / 國枝孝弘研究会(1)「臨床と教育」
学年（助成決定時）	3年

(3) 研究の目的

本研究の目的は、沖縄という土地において哲学対話という営みを行う場を増やすこと、並びに「子どものための哲学（Philosophy for Children:以下p4cと略記）」と呼ばれる哲学的な対話にもとづく教育実践のコミュニティを設立することを目指し、大学、学校、市役所、新聞社などで哲学対話を行う環境を整備することである。

さらに、この研究は、沖縄にある敏感な問題や扱いにくいとされてしまうテーマを見つめることを可能にし、異なる意見を対立で終わらせず、相互理解を促進しながら対話を通じて共に考え続ける場の土壌や文化を作り上げることに、哲学対話がどのように貢献できるかを探求するものである。また、このプロセスが、民主的な社会を構築するための重要なステップとなり得るならば、それらはどのように行われ、実践していけるかを検討したい。

(4) 研究の内容（行程等）とその手法

2023年5月23日(火)

沖縄・琉球大学教育学部開講の「新聞活用実践講座」の一コマにて哲学対話を行う。ここでは、はじめに実施者が哲学対話についての説明を行い、その後「金魚鉢方式」と呼ばれる手法を使い、2つのパートに分かれて哲学対話を行った。今回「金魚鉢」の手法を使ったのは、ファシリテーター1人に対し、参加者が20名ほどおり、哲学対話を行うのに良いとされる人数を超過しているため、人数を制限するためにも「金魚鉢方式」を採用した。

2023年6月23日(金)

沖縄県では「慰霊の日」に定められているこの日、平和学習講師の仲本和（なかもとわたる）さんが平和学習フィールドワークを行った。参加者は、平和ガイドとして活動を行なっている大学生や大学院生、社会人である。この日、参加者は読谷村の米軍上陸碑→チビチリガマ→嘉手納基地→普天間基地をめぐり、最後に一部の参加者と哲学対話を行った。

2023年6月24日(土)

今後、哲学対話をさまざまな学校機関や市町村で行いたいと考え、沖縄本島北部のOISTや名桜大学、名護市庁舎を、沖縄県在住の知り合いの紹介のもと見学した。

(5) 研究成果

5月に実施した大学での哲学対話では、哲学対話を初めて経験する人々とともに、学生から出た「友達ってどこからなの？」という問いを出発点に対話を展開。哲学対話を一度も行ったことのない/聞いたことのない学生たち、かつ今後教育の現場に出ていく学生が多い環境で、考えや問いを話せる場をつくることに重点を置き、哲学対話を実際に体験することで、いかに哲学的に考える場が普段少ないか、そして今後のフィールドで活かせるかを考えてもらうことを期待した。

当日の様子は琉球新報でも取り上げられ、授業（授業だとわからなかった。上には大学でのとしかないので）後のアンケートでは一部、「今後も忘れないであろう授業になった」「人の考えをディベートのように争うことなく知ることができて楽しいと感じた」「考えの変容を感じることができて楽しかった」などの声が寄せられた。

6月の、慰霊の日に合わせて実施した平和学習フィールドワーク後の哲学対話は、「沖縄という個別具体（この文脈だと「特殊な」かな。それが適切かどうかという問題はあるが）の事例のせいで切り離されてしまうような問題（その人の問題だと感じてもらえないような問題）を、その人にも通ずる問題だと考えてもらうにはどうしたら良いか」という問いが対話の出発点となった。これは平和ガイドを行なっている人たちから出た、切実な問いであった。6月の対話後は対話の振り返りをする機会もあったため、そこでの感想の一部を抜粋する。「哲学的対話の取り組み、私がガイドの中で常日頃悩んでいたことに一筋の光をもたらしてくれました！1年前から、沖縄という個別具体的な事象を、本土の人たちの身近な生活という個別具体的な事象と架橋するためには、本質的な根本的な対話が必要だということは考えてはいました。（中略）哲学的対話は、本当に素晴らしいと思いましたし、悩みを解決へと導いてくれそうな気がしました。自分なりにガイドに活かしていこうと思います」

(6) 活動の今後の活用

琉球大学での哲学対話は、ある程度期待した効果を感じられたのではないかと同時に、毎年一度しか行わないため、学生たちにとって一回限りのものでしかないという課題がある。となってしまう課題点がある。哲学対話は、何度も何度も繰り返し行うことで、民主的なコミュニティの形成に寄与することは、実際に長年哲学対話を実践する地域や学校でも明らかである。知名度の低い哲学対話を実際に知ってもらうことが当面の目標であるが、今後は、琉球大学や他の大学生にとっても、哲学対話を定期的に行える場をつくっていくことを目標としたいと考え、今回参加した学生や講座にまつわる関係者との縁を繋ぎ、沖縄での哲学対話の場づくりに専心していきたい。

また、哲学対話を行う場を単に増やすだけでなく、それをどのように活用していくかにも注力していきたい。私が沖縄において、あるいは沖縄に来た県外の人々にも触れる機会を増やしたいのが、平和学習の中で行われる哲学対話である。

今回の6月の哲学対話で、県外の人々との接触も多い平和ガイドの人たちから、問題が共有されない無力さや徒労を感じていると見受けられる（？）発言があった。形式的に平和学習を行なっても、対面した人にとって、「非日常」の一部となっている以上はあまり残るものがない。哲学対話の強みは、対話した人を「ともに考える他者」として認識し、自らも他者も疑い考えることを許されている場を知ること、自分ごととしてテーマを考えていくことができる点にある。そのため、形骸化しやすい平和学習において、取り入れる意義があると感じていた。